



イフパット だより

～農民参加なくして農業なし～

第26号 コロナ禍とイフパットの活動 その2



(写真1) アクション・プラン発表会を終えて (Bコース)
：「小林沙羅：初めての遠隔研修「農業を通じた栄養改善」コースを終えて」から

目次

- ・P1 初めての遠隔研修「農業を通じた栄養改善」コースを終えて 小林 沙羅
- ・P2 遠隔研修に参加した研修員たち 和田 彩矢子
- ・P3 イフパットでのインターン ① 金澤 有希
- ・P3 イフパットでのインターン ② 松田 莉緒
- ・P5 一時帰国 海外協力隊員向けのセミナー実施を終えて 積 奈津子

NPO法人 国際農民参加型技術ネットワーク

NPO-IFPaT International Farmers Participation Technical Net-work

初めての遠隔研修「農業を通じた栄養改善」コースを終えて

主任研究員 小林沙羅

2020年11月～12月と2021年2月～3月にかけてそれぞれ22日間、JICA筑波課題別研修「農業を通じた栄養改善」A（英語）コース及びB（仏語）コースを委託実施しました。新型コロナウイルスの拡大に伴い例年のような研修員の来日は不可能となり、遠隔研修となりました。ZOOMを使ったオンライン講義と事前に作成した録画講義、チャットグループなどでの質疑応答などのやり取りを組み合わせた初めての試みとなりました。

遠隔研修ではA・Bコース合わせてアフリカ諸国英語圏・仏語圏11か国から計22名の研修員が、農業、保健、教育、栄養コーディネーション、予算計画の分野から参加しました。研修コンテンツとして、農業の生産向上だけでは飢餓や栄養改善の解決に繋がらないというSDGsなどによる国際的な認識を基に、食料の分配についての社会経済的背景、食料の有効利用（加工・調理、補完食などの母子保健への活用、バランスの取れた食事）、栄養の吸収に関わる衛生環境や適切な保健サービスとの連携について学びました。また、農村における農家の栄養改善に寄与した生活改善アプローチや、昨今様々なセクターにより広められている食育、地場産物を活かした学校給食など、戦後の食糧難から栄養改善を実現した日本独自の経験や事例も学びました。

毎回のオンライン講義で、日直の研修員に前日の振り返りを行ってもらったり、オンラインでディスカッションをしたり出来るだけ研修が参加型になることを心掛け、研修員も意欲的に発言しました。国によってはホテルやJICAの在外事務所に集まってお互いの学びと理解を高めチームとして成果物であるアクション・プランと一緒に作成したケースもありました。遠隔研修となったことで、農村における栄養改善活動に取り組むベトナム人のNGOスタッフとオンラインで英語で意見交換をしたり、今まで視察先だった長野県の講師の方々ともアフリカ各国にいながら実



（写真2）研修視察先である長野県松川町ではローカルテレビ局の協力を得て、ライブ感のある録画講義を作成

例に基づいて活発にディスカッションをすることも出来ました。時空を超えた実務者同士のやり取りに、遠隔研修の強みも感じました。オンラインで学んだことや、発表したアクション・プランの内容を所属先のすぐに同僚や上司、JICA在外事務所の関係者係者に熱量を持ったまま伝えられる利点もありました。ロックダウンが厳しくない国々では、研修終了後早速集落に行き、栄養改善活動を始めた研修員もいました。時差の関係から、オンライン講義が終わると日本の夜となりましたが、講義後も研修員同士で学んだ演習方法をZOOM上で集まって復習する相互の学び合いも見られました。研修最終日には各画面から拍手がやまず、涙を流す研修員も。3週間連日の研修が終わった後には、実際対面で同じ時間をともに過ごしてきたような感覚がありました。

新型コロナウイルスという未曾有の状況の中、出来ないことをプラスに変えつつ試行錯誤の遠隔研修となりました。支援する側である私たちがその場において手取り足取り教えなくても、相互のインタラクションの機会やインプットをきっかけとして提供すれば、研修員の学ぶ意欲や主体性を引き出すことが出来る可能性を感じました。これらの遠隔研修実施結果から、途上国の人々が本当に主役となるアフターコロナの新たな研修を通じた人材育成、ひいては国際協力の形が垣間見えたようでした。



Example	Jan	Feb	Mar	Apr	May	Jun	Jul	Aug	Sep	Oct	Nov	Dec
Weather	Rainy season				Dry Season				Rainy season			
Diseases	Malaria		Diarrhea		Catch a cold		Water shortage		Overwork			
Farming	Weeding		Harvest		Sowing		Winter cropping		Harvest for winter, Slush & burn		Sowing	
Meat, Fish and beans	Ant-flies		Chicken		Fish		Beef		Kidney beans		Lake flies	
Cereals and tubers	Cassava		Maize		Rice		yams		Cassava		Rice	
	Bananas				Maize		Maize					
Vegetables and fruits	Black jack		Pumpkin leaves		Sour cop		Amaranths		S. potato leaves		Mangos	
	Mangos		Oranges		Pawpaw		Avocados		Cassava leaves			
Cultural/ Social events	New year				Community works		Traditional Dances		Festivals, wedding		Christmas	
Others	Shortage of Food											

（図1）演習で作成した「季節カレンダー」：対象集落における農業、保健、経済・社会状況、食料へのアクセスなどを書き出し、年間を通じた課題を視覚化し、何を改善出来るか話し合うツール。

最初の懸念点は、アフリカ諸国のインターネット環境でした。研修員は時に業務先の集落や、通勤中の乗り合いバスなどからもオンライン講義に参加し、後ろでニワトリの声やリズムカルなアフリカン音楽が聞こえてくることもありました。普段からのインターネット接続の不安定さのみならず、突然の停電や雨季の豪雨による音声の途切れなど、様々な事情を乗り越えつつ研修は進みました。ZOOMの小さな分割画面に映る研修員の表情や、インターネット接続が不安定のためビデオ・オフで聞こえてくる声に注力するようにしました。今までの対面での研修のように講義の間の休み時間や昼食時間に雑談をはさみ、研修員との信頼関係を築きながら研修を進めることが出来ないもどかしさもありました。

遠隔研修に参加した研修員たち 「中南米地域生活改善アプローチ 持続的農村開発 のための普及手法の適用と普及員育成」コース

理事・主任研究員 和田 彩矢子

2020年10月～12月の6週間強、中南米地域8カ国15名を対象に「生活改善アプローチ 持続的農村開発のための普及手法の適用と普及員育成」コースを委託実施しました。

参加した中南米の農村開発分野担当者は、在宅勤務で既にズームを用いた遠隔会議を実施し、マスクをつけて集落活動を再開し始めた時期でした。遠隔での課題別研修に理解を示し、応募者が例年なみにいた事には、数か月前から録画教材作成に取り組んできた運営サイドとして内心安堵しました。



(写真1) 遠隔研修に参加した、研修員、研修管理員、イフパット担当者。

「遠隔研修に慣れるまでの2週間は苦労した。家庭や職場で日々の義務を果たしながらコースを受講するのは、来日しJICAで毎日24時間研修に専念できるのとは違う。でもコミットメントと責任感、謙虚さで乗り切った。」 コスタリカ国立大学所属のカルメン研修員のこのコメントに集約されるように、全員が自らの業務と同時進行に苦労しながらも、熱意をもって研修に参加し、議論や意見交換を展開させました。カルメン研修員は、所属先からの初めての研修参加ですが、生活改善アプローチ関連の論文を執筆する帰国研修員（保健省職員）の担当教師として、今回習得した事を論文助言にも活かせる、また自国の実践事例のおかげで予備知識があり研修内容が包括的によく理解できたと発言。副業の高校講師としても生活改善の普及を展開すると意欲的です。

グアテマラ農牧食糧省のクラウディア研修員は、集落訪問の帰路、度々交通渋滞に巻き込まれながらも、携帯電話で接続し、公用車から積極的に意見や実例を述べました。彼女は毎年研修参加を希望するも、役職柄上司の許可が下りず断念していた方。今回遠隔研修で通常業務との兼務という条件下で初めて参加できたので、その意欲と熱意は他研修員に好影響を与えるほどでした。来日研修が難しい多忙な高官・中間層にとって、現地から参加できる点は遠隔研修のメリットであることを実感しました。

一方、出席率が77%にとどまった同じ農牧食糧省市役所配属普及員のマリア・ホセ研修員は、研修開始直後に大型ハリケーンが活動地域に上陸し、大規模な土砂災害で150名以上死者も出たことから、緊急災害対策業務の対応を強いられました。当人は自宅に帰れず深夜、週末まで対応しながらも、本研修に対する責任感が強く、対策本部からインターネット接続し、懸命に内容理解に取り組みました。途中、研修の遅れを悲観し挫折しかけていた際には、週末にじっくり話を聞き、気持ちに寄り添い、代替案を提示するなど、特別フォローを行いました。同国の他研修員のサポートもあり、困難な状況下リタイヤする事なく、生活改善推進案を具体的に作成し、研修終盤には笑顔で参加する姿が確認できました。

在外補完研修の代替として、中南米のコンテキストで、いかに生活改善活動を実践し政策に取り入れているのか、パナマ及びコスタリカとオンラインで講義・質疑応答を実施しました。パナマの動画教材では、コロナ禍で外部者が先住民地域に立ち入る事が出来ない中、実践者である先住民自身が家庭内改善の事例を撮影し、活動を通じた気持ちの変化や自信に関しコメントを寄せてくれました。女性だけでなく、男性の理解や関与も確認でき、家族全員で生活改善に取り組んでいる様子が動画で明快に示され、研修員の理解深化に貢献しました。無論、実際に訪問するに越した事はないものの、教材と質疑応答で、成功事例だけでなく、苦労や失敗も共有され、研修員からは「自分の所属先でも出来そうと確認でき、心強い」「幼少期からの習慣付けが可能となるので、コスタリカで活用された学校用生活改善マニュアルを参考に、自分達も実践したい」といった声が聴かれました。

在外講師をお願いした帰国研修員にとっても、これまでの活動を振り返り、第三者への説明内容を吟味する過程が、自身の糧になったと報告がありました。以前より一層の経験が伴い、発表や意見交換時に自信をもって受け答えする様子が確認できました。これは、コロナ禍で在宅時間が増えている現状、家族で生活改善の協議・実践が増えたこと、また、地域全体を考慮したコロナ予防の考え方が生活改善の考え方と一致するので、住民の理解が増し、活動が活発化した事が要因のようです。

中南米にとって重要な死者の日の時期に実家で家族と過ごす時間を割いて研修に参加した者、コロナ禍で中止されていた娘のバレエ教室が急きょ再開され止む無く駐車場から参加した者など、皆苦労しながらも熱心に学びを深めました。今回遠隔研修となり、教育省、文化省、野生動物保護研究所など、初めての機関から参加する研修員が11名おり全体の7割を占めました。管轄分野は様々であれ、普及手法や住民の主体性の発現を模索する者同士、課題を共有しながら良い議論がなされました。先住民地域内のジャガー保護活動に生活改善アプローチを導入し、住民の意識変容を試みる計画を立てた者もいます。研修運営サイドとしても、意外な分野での活用が検討され、波及の裾野を広げ、活動の可能性が広がったことは、遠隔研修の新たな発見でした。次年度も遠隔ながら研修員に寄り添い、サポートしていきたいと考えます。

IFPaTのインターンを終えて

(筑波大学一年生) 金澤有希

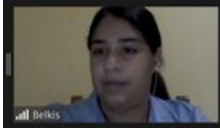
筑波大学社会・国際学群国際総合学類1年の金澤有希と申します。2021年1月下旬から3月上旬にかけてIFPaTでインターンをさせていただきました。今回は、その活動内容、学んだこと、そして今後への活かし方について書かせていただきます。

私は、約2か月にわたり、農業を通じた栄養改善のフランス語コースに参加しました。ミーティングに参加した際にはフランス語でのタイムキーパーを務め、質疑応答議事録を作成しました。また、研修員と講師の方を結び付けるために、録画講義への質問とコメントの翻訳、研修員の興味関心のまとめなども行いました。研修員の出身国の栄養状態のデータ分析やアクションプランの要約、フランス語での自己紹介も行いました。さらに週に一度のフォローアップ会議では、毎回国際協力の現場で活躍されている方々から、その活動内容からキャリアに至るまで貴重なお話を伺うこともできました。

これらの活動を通して、栄養問題に関する知識を得たり認識を改めたりすることができました。これまで栄養不良の原因は、貧困により食料が手に入らないことだと思い込んでいました。しかし、実際には、たとえ食料があっても栄養の重要性や栄養の良い調理法を知らないことが原因で栄養不良になる場合もあると知り、栄養問題の解決には様々な分野の協力が必要であることを学びました。その中で、生活改善が栄養改善につながるということを知ることができました。国際協力には高度な技術が必要だと考えていた私にとって、現地にあるものを利用して誰でもできる生活改善の取り組みは画期的でした。また、生活改善の際に、生改さんや給食システムなど日本の戦後の経験が現在の途上国にとって役に立つものであることも分かりました。これまで、日本は経済的に豊かな先進国中の一国として支援をしていると思っていましたが、先進国の中でも日本だからこそできることがあるのだと認識を改めることができました。また、IFPaTの方々が、毎回丁寧なフィードバックをしていただいたことや、フランス語で会議を進行し研修員の方とコミュニケーションをとっている姿を見て、議事録の書き方や語学力の重要性を学ぶこともできました。フォローアップ会議

生活改善コースの在外講師をお願いした帰国

研修員の報告 (パナマ国)



その① 実践事例の共有:

生活改善活動として、お金のかからない改善活動にフォーカス。高齢者との活動として、野菜作りをしたが、農業が目的ではなく、家族の関係性を良くし、自分の存在価値を高め自尊心に繋げることを目的として活動をした。パナマでは、当案件の帰国研修員だけでなく、OVOPや他のコースの帰国研修員や様々な組織の者から生活改善普及ネットワークが構成されており、相乗効果を生み出していた。

(写真) 農場における野菜栽培教室



その② 先住民地域の事例: 散村であり集會をする場所まで家から徒歩30分程だが、コロナ禍でも2か月に一回集まっている。帰国研修員である農牧開発省普及員も先住民であり、生活改善の説明は現地語ノベ語で説明している。

研修で学んだツール「幸せツリー」を実施したところ、母さんたちは「子供達が良いものを食べて笑っている事が幸せ」と分析した。その後、栄養ある家庭菜園をする、という活動が立案された。

(写真) 集會の様子



	A	B	C	D	E	F	G	H
1	Données pour le rapport Initial	à compter du 8 janvier 2021						
2	Sous-nutrition maternelle et infantile	année	référence	Algérie	Burkina Faso	Tchad	Guinée	Sénégal
3	Femmes							
4	Insuffisance pondérale (>18 ans) (%) IMC inférieur à 18,5 kg/m2	2016	SOWC	4	13	14	11	11
5	50	2016	SOWC	36	50	48	51	
6	Anémie chez les femmes enceintes (%)	2016	Global Nutrition Report	39	58	52	61	58
7	Surpoids (%)	2016	Global Nutrition Report	66	29	30	34	36
8	Enfants							
9	Retard de croissance, modéré et sévère, tous les enfants (%)	2013-2018	SOWC	12	21	40	32	17
10	Emaciation, modérée et sévère (%)	2013-2018	SOWC	4	9	13	8	9
11	Surpoids, modéré et sévère (%)	2013-2018	SOWC	12	2	3	4	1
12	Anémie (%)	-	DHS	-	87.8 (2010)	-	74.6 (2018)	70.9 (2017)
13	Carence en micronutriments (%) *2	-	-					
14	Insuffisance pondérale à la naissance (%)	2015	SOWC	7	13	-	-	18
15								

(写真) インターンとして担当した各国栄養状態のデータ分析

では、国際協力の多様性を知り自分のキャリアの選択肢を広げることができました。

今回のインターンシップで、国際協力の現場を初めて直接見ることができ、また、お話を伺った皆さんの国際協力に対する強い思いや行動力を感じて、私も国際協力に携わりたいという気持ちが一層強くなりました。今回、栄養の分野は他の多くの分野と関りがあり様々な視点が必要であることを知り、今後他の問題を扱う際にも栄養の分野との関わりを意識し、視野を広く持てるようにしていきたいです。この春休みからは、インターンシップで得た知識の復習や英語とフランス語の学習に力を入れていきたいです。

最後になりましたが、完全オンラインでの実施の中、様々な工夫をしていただいたおかげで多くの学びを得ることができました。お忙しい中インターン生として受け入れてくださりありがとうございました。今回の経験を活かして将来皆さんのように国際協力の現場で活躍できるよう頑張りたいと思います。

イフパットのインターンを終えて

(筑波大学一年生) 松田莉緒

こんにちは。今回IFPaTさんでインターンシップをさせていただいた筑波大学生命環境学群生物資源学類1年の松田莉緒です。

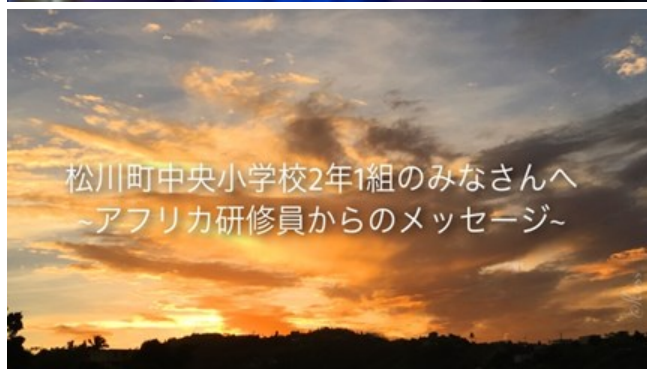
私は将来国際協力に関わっていく人になりたいと思っており、国際農業開発や食を通しての途上国への支援について学ぶために筑波大学にきました。しかしこの一年、自分の大学生活を振り返って見たときに自分の夢に対して動けたことは何もありませんでした。コロナ禍や、バイトやサークルの忙さを言い訳にしていはいけないと思い、一歩踏み出すためにIFPaTさんでのインターンをさせていただくことにしました。

フランス語で行われる栄養改善研修の会議の参加とその際の質疑応答の議事録作成をはじめ、長野県松川町の子供達へのメッセージビデオの作成、各国の栄養状態についてのデータ比較、中間レポートやアクションプランのまとめなど様々な仕事を任せていただきました。途上国の現地の方々とお話ししたり、実際の国際協力の仕事に関わらせていただくのは初めてだったのでとても良い刺激を受けました。IFPaTのみなさん、JICAのみなさんの姿勢からは、国と国との間の壁を一切感じられず、それが本当にかっこよくて、自分もみなさんのようになりたいと思いました。

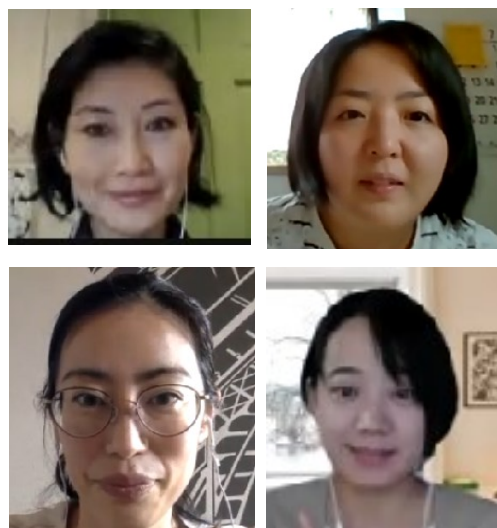
またそれ以外にも毎週のフォローアップミーティングも設けていただき、キャリアについての貴重なお話を沢山聞かせていただきました。当初の仕事に加えて私たちのために時間をとってくださったことを本当にありがたく思います。この時間のおかげで自分の将来について一番よく考えるきっかけとなりました。みなさんの仕事は一つ一つ違う役割を持っており、自分にしかできない仕事を持っているようでした。そしてその道に向かってまっすぐ進んでいってらっしゃいました。自分は単に“国際協力”、“途上国”などとまとめて夢を掲げてしまっていて、まだこれだという専門分野や道を

持っていませんでした。自分にできることをまずは知ったり、国際協力における新たなアプローチを考え生み出したり、私の進んでいく道の可能性は無限にあると思います。今から動き出そうという強い気持ちをみなさんのおかげで持つことができました。

1月の中旬から短い間でしたが、積さんや小林さんをはじめとしたIFPaTのみなさんから学ばせていただいたことはあまりにも大きかったです。本当に感謝の気持ちでいっぱいです。この気持ちを自分の原動力にして、これから自分の道を進んでいきたいと思っています。そしていつかIFPaTのみなさんからの学びを、いただいた大きな恩を、途上国や世界に還元していきたいと思っています。



(写真)インターンとして担当した長野県松川町とのメッセージビデオ



本イフパットだより26号の作成に、そして事業実施に協力していただいた、NP0-IFPaT女性陣

一時帰国海外協力隊員向けのセミナー実施を終えて

研究員 積 奈津子

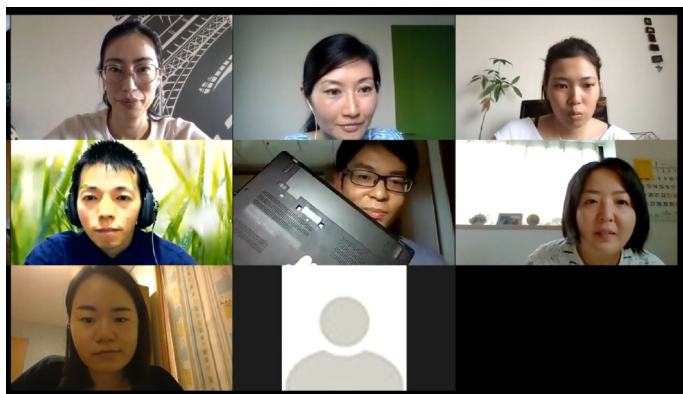
2020年始め、新型コロナウイルスの影響で海外協力隊員の方達は一時帰国を余儀なくされました。OVの1人として、活動途中で一時帰国を余儀なくされることが、どんなに悔しいことか、その思いは手にとるように伝わってきました。そんな中、IFPaTの若手女性陣の有志OVメンバーが中心となって何かできることはないかと話し合い、2020年7月～8月に「再派遣応援！コミュ開ツール紹介＆相談会」「再派遣応援！栄養改善の事例とツール＆相談会」を計3回にわたってオンラインにて実施、延べ12名の方にご参加いただいたことを今回報告したいと思います。

いずれのセミナーでも、1) 隊員活動に生きる生活改善ツールの紹介・演習、及び2) 相談会、の2本立てとして企画しました。1) では「点検マップ作成」「自分の得意なこと」「季節カレンダー」といったどれも実際の現場で使われているものであり、かつ参加者が再赴任後にすぐに使えるものを選定しました。Zoomを使ったオンライン研修ながらも、座学だけではなく実習の時間も取り入れることで、生活改善アプローチの手法を学ぶ手立てを工夫しました。また、ツールの学習を行なったあとは、隊員の活動にまつわる相談会を後半戦として実施。協力隊OVの立場や技術協力プロジェクト等の経験や働く女性、母親の立場も踏まえながら、悩みを軽減する方法と一緒に考える時間を設けました。少人数回数ならではの取り組みとして、相談会は事前アンケートに基づいた内容とし、終了後にそれぞれの参加者宛の相談事項への技術的な情報も含めた1,000文字以上に及ぶ応援メッセージもお送りしました。

参加者の方からは「活動に対し振り返ることが精神的にキツかったり、現実から目を背けたい時もありますが、プロとして強く頑張ってもらってるIFPaTの皆様の暖かいコメントをいただけたことがとても嬉しかったです」「現地での活動はコミュニティ開発に近いものであったが、活動の技術を得る機会がなかなかなく、とても参考になった（PCインストラクター職種）」など好評の声をいただき、任地の活動や一時帰国中の悩みを聞き、今後に向けた具体的な改善点を見出すことで、参加者のモラルサポートにつながったと考えています。また、副次的な効果として、オンラインの遠隔研修をJICAの課題別研修が始まる前に実施できたことで、オンライン研修での演習実践（オンラインでも演習が想定以上に成り立つという発見）やオンラインファシリテーションの仕方（最初に話しやすい雰囲気を作る必要がある、参加者の参加を促すためには積極的に話を振る必要がある等）など、運営側としても学びの多いセミナーでした。

また、一時帰国JOCV向けのセミナーのノウハウを活かし、2020年9月にも同様の形式で大学生を対象に「国際協力の第一歩を踏み出そう」を開催、4名の学生さんにご参加いただきました。新型コロナウイルスの影響でJICAの受託事業の先

行きが見えない時期でしたが、今回の一連のセミナーを通じて、実りの多い実践と知見を得ることが出来ました。新しい試みでしたが、セミナー開催を暖かく見守ってくださったみなさま、ありがとうございました！



(写真) 地域にある資源を見つけるためのワークショップの実践：「自分の得意なこと」を発表しあう参加者の様子です。PCインストラクター職種の参加者が簡単に出来るPCの修理方法について、PC実物を見せながら説明してくださっています。

NPO便り第26号に寄せて

イフパット業務の主体を成すものの一つが、JICA研修事業委託業務です。コロナ禍で海外からの研修生受入が困難となり、多くは遠隔研修となりました。今回、生活改善と栄養改善関連の遠隔研修の概要を研修業務総括を担当した主任研究員の和田、小林に報告して貰いました。

栄養改善の研修コース実施に併せイフパットはインターン2名を受入れています。2名のインターンは、それぞれ研修業務の中で重要な役割を果たし、効果的な研修実施に大きな貢献をしてくれました。同時に、日本国内ですが国際協力の現場に肌で触れ、各自これから進む道に何らかの示唆を受けることができたのではないかと思います。

最後の積研究員の報告は新型コロナウイルスの影響で一時帰国を余儀なくされた青年海外協力隊員を支援するため、IFPaTの若手女性陣の有志OVメンバーが中心となって何かできることはないかと話し合い、「再派遣応援！コミュ開ツール紹介＆相談会」「再派遣応援！栄養改善の事例とツール＆相談会」をオンラインで実施したものです。

コロナ禍を災いとしてだけではなく、その中でできることを前向きに模索し新しい活動を展開する「IFPaT若手女性陣」には頭の下がる思いです。

編集文責：永井 和夫

「イフパットだより」に関する照会・連絡先

NPO法人国際農民参加型技術ネットワーク（イフパット）
〒300-1241 茨城県つくば市牧園5-13-203
TEL: 029-875-4771 E-mail: info@npoifpat.com
ホームページ: <http://npoifpat.com/>